

幼稚園の眞生活

東京府女子師範學校附屬小學校主事

時 下 米 太 郎

四

幼稚園は幼児の全家庭生活と小學生活の中間に位する。けれども決して小學入學の準備教育であつてはならない。蓋し幼稚園はそれ自體が獨特の意義を持つべきものであつて、若し準備教育としての幼稚園があるとするればそれは大いに反省しなければならぬ。

幼児は生れ落ちるに温い家庭で愛され我儘を通し得るのに對し、幼稚園の生活は園児にまつて全く新しいそして教育的に數多くの重要な意義を持つものである。

まづ幼児のこれまで過つて來た家庭生活が基礎的重要性を有する事は勿論である。即ち他の何者の準備的生活でもあつてはならない。同様に幼稚園生活も亦絶對的に獨自の意義がある。

園児には入園の日から園友が出来る。これらの園友こそは、園児が家族以外の人に親しく交る最初の友人であり同行者であり、その一員となつて園児は互に協力して一の社

會を作るのである。

かうなるに園児は今までの全家庭生活時代のやうに我儘放題では通れなくなる。自分が我儘をすれば自分の園内の生活に不都合が生じる。又他の園友が我儘をすれば自分が迷惑を感じることも分つて來る。従つて今までの勝手氣ままの生活を少しづつ差控へなければならなくなる。謂はゆる「本能の整理」を必要とされるに至る。これは反省の結果、か養育の効果と云ふには餘りに本然的な動向である。

幼児が社會人として國民として育つ第一歩はこゝから始まるとも見られよう。よりよき幼稚園時代を持つ幼児の現在並に將來の幸福は蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。

併し幼稚園に於てはかゝる教育的効果は最初から所期の目標に掲げて一定期間内に急速に強要すべき性質のものではない。成人の立場を以て之に臨み、その既成的生活を強

ひたりなきしては幼児は恐らく美しい芽生えを踏みにじられて了ふ程の不幸を見るに至るであらう。

園児はやはり園児同志に育つものであつてそこでは園児の許された世界の本然な生活が廣げられ続けられてゆく。

この生活の本然性の豊かなほゞ園児は素直に麗しく健かに育つのである。

そしてそこには園児相互に融和したおのづからの遊びがある。園児はこの遊びの間に自らの環境をよく観察し鑑賞し、模倣してゐる中に發見と創造の天工がなされる。こゝに遊びはそのまゝ徳育にも智育にもなり又體育の使命をも果たす。

幼稚園の普通教育は遊びの間に在るを云つてよい。遊戯・行進がそれであり、土いぢり・砂あそびもそれであり、折紙・切りぬき・寫生等もそれである。園内生活すべてがそれであり、入園後の家庭生活も亦そうした傾向になる。

保母は園児等と共に遊び耽りつゝ一面には常に靜かに見守つてゐる心で時々僅かに方向づけてやるのでよいと思ふ。

これまで人見知りした子が多面的に園友と交り、圓満に自在に遊べるやうになる。偏食的傾向が次第に直つて何でも美味しく食べられるやうになる。自分のこゝに苦情を云はなくなり、友達の間話までするやうになる。その變化・

進歩の素晴らしいのには驚く外はあるまい。園児はこれまで家庭内で大人の生活に交つて一種の退屈を感じてゐたものが、今は楽しい遊びに遊びつくせぬ思ひになる。無聊を食物でまぎらしてその爲に胃腸を損ね勝ちであつた事は全く跡を断つて了ふ。

かうして幼いながら次第に自主的生活態度になり、情操は豊かに克己の美風すら養はれて來て、一方健康度の高まるこゝろから身體の發育も目に見えて著しい。今まで他より與へられ通した一日の生活が今は自ら進んで開拓する楽しい生活に變り、更に明日の楽しさへ展開してゆく。

園児が一たびこの境地に至ればその幸福は何ものにも替へ難い。初春の日光を浴びた草木のやうに、冬籠りの芽が健かに麗しくすくすく伸びてゆく。これだけでもう十分である。何の爲の準備であらうぞ。神の國の神々しさは此の園児等の育つ喜びにある。神の子の尊さは此の園児等の上に盡きるを云つてよいであらう。

幼稚園の眞生活は此の理想境を地上に實現し、そこで皇國の寶としての園児を本然の姿に育むこゝにあると思ふ。